

## 2016年度 第2回学部評価会議報告

### ■概要

日時：2017年3月9日(木) 19:00～

場所：Galleria 商.Tokyo(丸の内サテライトキャンパス)

### ■学部評価会議 参加者

池田 博義 氏

マイツグループ 代表取締役統括社長

### ※以下、五十音順

浅川 潤一 氏

千葉商科大学附属高校 教頭

親泊 寛昌 氏

東京都立千早高等学校ビジネスコミュニケーション科 ビジネス科 主幹教諭

五島 勝也 氏

バニラ・エア株式会社 代表取締役社長

須田 秀伸 氏

西武台千葉中学校・高等学校 校長

土田 博幸 氏

内外日東株式会社 管理部 人事研修チーム チーム長

宮内 史絵 氏

株式会社フィナンシャル・エージェンシー 業務本部 業務ソリューション部 担当部長

森山 育子 氏

株式会社ジェイコム市川 代表取締役社長

## ■本学関係者

宮崎 緑 国際教養学部長

久保 裕也 教授

鈴木 恒雄 教授

山田 武 教授

渡辺 恭人 教授

施 敏 准教授

常見 陽平 専任講師

ムズラックル ハリト 専任講師

本学関係者より、学部の年度教育計画と海外短期研修の内容について報告を行い、参加者より下記のご意見やご助言をいただきました。国際教養学部では、この度いただいたコメントを教授会で共有し、今後の教育活動に活かしていきます。

➤海外短期研修においてミッションに真摯に取り組んだ姿勢は評価できる。ミッションの内容よりも、環境に適応し、コミュニケーションを取り、学生なりにハードルを超えてきたのだと思う。PDCA サイクルを回すことができると、より充実した学修機会になると感じた。

➤学生達がホームステイ先での問題や移動時のトラブルなど経験を通じて、問題解決の経験を得られたことは良かったのでは。出発前の結団式の時と帰国後の報告会では学生達の顔つきにも変化が見られた。海外短期研修を終えてからの学修が重要になってくると感じている。

➤海外短期研修を終えた学生が、「語学学修を事前にもっとすべきであった」と気づくことができたことは大きな成果であると言える。大学が有する語学学習環境を利用して話す練習を継続することが大事。今後は経験を糧に異文化や世界で起こっている事象に対し「なぜか」という疑問を持ち、その疑問を研究テーマとして学修を深めていってはどうか。

➤海外短期研修を通じて学生は自信をつけたことと思う。一方、学生達は自分の興味があるもの、探求していくべきテーマが何であり、海外での学修後、次にどのように繋げていこうと思ったか、帰国後に行った報告会では、学生発表の様子からはそれらが見られなかった。学びたいことが明確になっていることが、3年次以降の学修や就職活動を行う際に有益である。

➤高校でも同じ興味・関心を持つ人と関わりを持ち、協働して問題に取り組み、解決するという学修を行っている。これまでの学修を通じて得た興味や関心を今後の学修にどのように活かすかが課題である。海外短期研修で得た経験や人脈を活用して、課題に取り組み、問題解決ができるとより深い学修ができると感じる。

➤学生が学年の枠を越えて関わりが持っていると感じた。学生達は縦の繋がりを作ることが苦手だが、縦の繋がりを持ち、上級生の姿から自らの将来像がイメージできることは学修を進めていくうえでとても有効である。また、学部としては、海外短期研修を終えた学生が語学力の向上以外にどのような変化があったのかを把握するなど、今回のプログラムにどのような効果があったのかを評価することが大事である。

➤自身が国際交流について高校で講演を行う際には「国と個人は違う」ということを伝えている。自分の講義に寄せられた感想を見ても、多くの生徒はその国と人のイメージを結びつけて考えてしまっており、国際理解は自然に醸成されていくものではないと感じている。国際理解を深めていくためには、国際交流の機会を増やすこと、学修させる機会をつくることが重要である。

➤国際教養学部は国際社会が大きく変わろうとしているところに誕生した。学生は、2年次の海外短期研修だけでなく、3年次以降も世界に触れることができる機会が持てると良いのではないかと。海外短期研修で築いた人間関係を大切に、現地の友人と繋がり続けることこそが国際教養学部の学生にとっても日本にとっても財産である。そのなかで得られる経験を今後の学修にどのように繋げていくのが重要である。

以上